

2009年度(平成21年度) 進路決定状況 実数													平成22年6月18日 15 時現在					
進学先 就職先	国公立大				県内私大				県内短大		県外私大・短大		大学 校	専門学校		就職		その他 職訓
	琉大	県看	県芸	県外	冲国	名桜	冲大	キリ学	キリ短	冲女短	大学	短大		県内	県外	県内	県外	
合格者数	11	2	3	4	31	10	4	3	5	5	22	3	11	126	20	4	0	6
合計	20				48				10		25		11	146		決定率 80%		6
数値 目標	25人				冲国大40人											決定率 90%以上		

平成21年度 進学・就職決定者数							平成22年6月18日 15 時現在			備 考
	AO		推薦		一般		合計			
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	計	
琉球大学	2		4	1	2	2	8	3	11	
県立看護大学				1		1	0	2	2	
県立芸術大学						3	0	3	3	
沖縄国際大学	6	2	5	13	4	1	15	16	31	
沖縄大学	1	1	1			1	2	2	4	
沖縄キリスト教学院大学		2		1			0	3	3	
名桜大学	2	1		3	2	2	4	6	10	
(県内大学計)	11	6	10	19	8	10	29	35	64	
沖縄女子短期大学		1		3		1	0	5	5	
沖縄キリスト教短期大学		1		3		1	0	5	5	
大学校				9		2	11	0	11	
(県内短大計)		2	9	6	2	2	11	10	21	
県内医療系専門	7	2	1	12	1	5	9	19	28	
県内訓練校						6	6	0	6	
その他の専門学校	2	3	28	28	27	10	57	41	98	
(県内専門計)	9	5	29	40	28	15	66	60	126	←訓練校は含めず
《県内進学小計》	20	13	48	65	44	27	112	105	217	←訓練校含む
県外国公立大学		1	3				3	1	4	
県外私立大学	2	1	7	10	2		11	11	22	
(県外大学計)	2	2	10	10	2		14	12	26	
県外国公立短大							0	0	0	
県外私立短大				2		1	0	3	3	
(県外短大計)				2		1		3	3	
県外医療系専門	2	1				1	2	2	4	
その他の専門学校	3	3	5	4	1		9	7	16	
(県外専門計)	5	4	5	4	1	1	11	9	20	
《県外進学小計》	7	6	15	16	3	2	25	24	49	
進 学 総 計	27	19	63	81	47	29	137	129	266	
県内就職						2	2	2	4	
県外就職							0	0	0	
就 職 総 計						2	2	2	4	
総 計	27	19	63	81	49	31	139	131	270	進路 決定率 = 86%

研 究 報 告 書

沖縄県立読谷高等学校

I 研究主題

やる気から波紋する学習意欲向上

～進路のしおり活用による進路指導を中心とした学力向上～

II 研究主題の設定理由

本校では平成 20 年度入学生より特進を 2 クラス設置し、本年度以降は希望者が 80 名以上で、その上位 80 名の学力平均が一定以上である場合には各学年最大 2 クラスの設置となる。現在は、3 年に 1 クラス、2 年に 2 クラス、1 年に 2 クラスの合計 5 クラスが特進クラスである。特進クラス各学年 2 クラス体制に向かう中、特進クラスの学力向上並びに一般クラスの学力向上が大きな課題となる。つまり、特進クラスにおける「やる気」ある生徒、一般クラスにおける「やる気」ある生徒の意欲を引き出し、どれだけ全体に波及させることができるかということである。そこで従来資料集である「進路のしおり」を改編し、積極的に進路指導・生徒理解に役立てられるようにした。「高校 3 年間の凝縮はダイヤモンド」という概念から高校生活を一冊にまとめ、あらゆる場面で生徒理解に役立つ、特に進路指導に活用できる「進路のしおり」を目指した。生徒一人ひとりが 4 月の入学式・始業式から始まり各行事を通して卒業までを思い描き、進路決定の財産となることを期待する。そこには、生徒個々人の高校生活の様々な場面が記録されるはずであり、その記録は進路決定に向けての「やる気」となり、学習意欲の向上につながると考え、研究主題を設定した。今回の研究を通して、本校の課題を職員間で共有化を図りつつ、生徒にとっての高校 3 年間で連続している時間であるとういことを意識して、生徒個々人の進路実現に向けた支援体制づくりを目指したい。

III 研究の内容

1. 研究主題定義

- (1) 「やる気」： 夢への目的意識とその過程における計画力
- (2) 「波紋する」： 生徒個人の「やる気」がその個人を中心にして周囲に広がる
- (3) 「学習意欲」： 新たなる知識を取り入れ、自ら成長させようという気概
- (4) 「進路のしおり」： 高校 3 年間で視野に入れた書き込み式の冊子
- (5) 「進路指導」：
 - ①進路講演会開催による進路決定に向けた意識高揚
 - ②進路のしおり活用による生徒自身の自己理解促進
 - ③進路情報の発行による具体的情報提供
 - ④学年会との連携による早期進路決定に向けた取り組み
- (6) 「学力」： 高校生活のあらゆる場面において積極的に学ぼうとする力

2. 研究目標

「進路のしおり」を活用し、高校 3 年間で連続した時間であると実感させ、生徒個々人の「やる気」と「学習意欲」を向上させることにより「学力」を高める。

3. 研究仮説

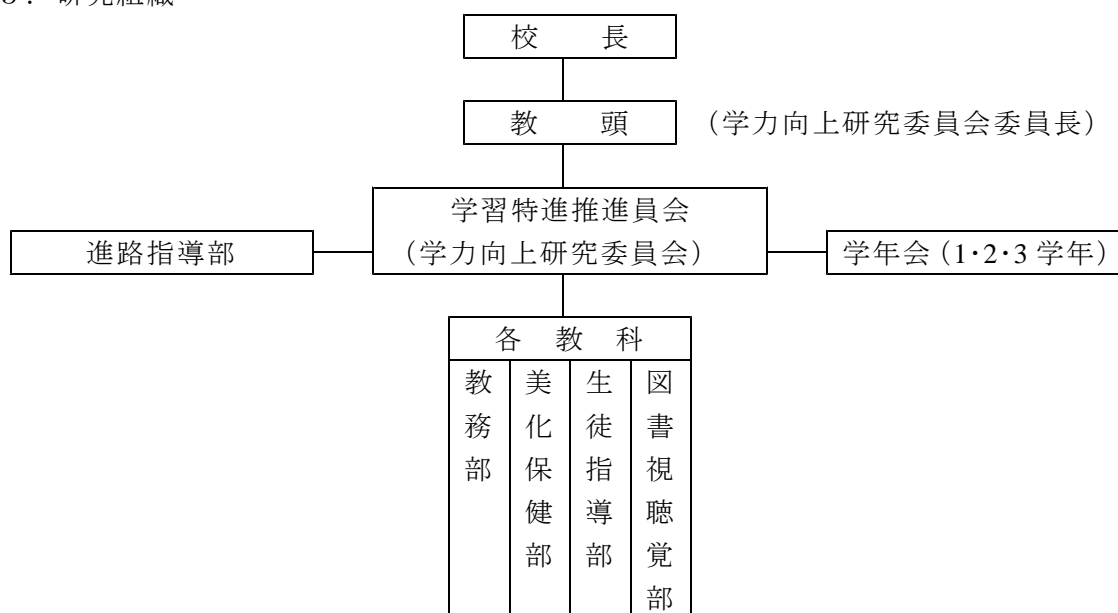
(1)生徒が進路を考えて日頃の学習を進める過程において、(2)3年間持ち上がる「進路のしおり」を作成し、活用（3年間を念頭においた日程・計画表・学習時間・進路講演会感想の記入や各学期の評価や模試個人成績の記録、HR担任や進路部との面談資料に）することにより、(3)学習意欲のある生徒はますます意欲が増し、またその意欲は他の生徒へ影響し、全体としての学習到達度も高くなるだろう。

4. 研究仮説の背景

(1)平成20年度2学期反省に、1学年会から「生徒の家庭学習の量が少ないという話があるが、その根底に目標が欠けている事が考えられる。そこで進路部が核となって、1年から系統立てて進路指導をするためにLHR・総合学習等計画的に組んで欲しい。」との要望を受け、3年間を通して活用できる「進路のしおり」改編へと動いた。その際、「学年別進路指導年間計画」を月単位で掲載し、特に継続的な指導が必要とされる就職についても生徒の目を向けるよう工夫した。

(2)高校生活3年間の継続的支援がしにくい中で、3年間連続して利用できる「進路のしおり」を活用することにより、継続的な支援につなげたい。

5. 研究組織



* 研究指定校という位置づけのもと、本校の実態をしっかりと見据え、進路指導部・学年会を中心として全職員で取り組む。

6. 研究仮説検証について

(1) 資料

- | | |
|---------------------|---------------------|
| ① 1学期学習状況リサーチ結果 | ② 2学期学習状況リサーチ結果 |
| ③ 1学期実力テスト結果 | ④ 2学期実力テスト結果 (1・2年) |
| ⑤ 11月希望者模擬試験結果 | ⑥ 学力向上研究アンケート (生徒用) |
| ⑦ 学力向上研究アンケート (職員用) | ⑧ 進路のしおり |

(2) 資料分析 (現状把握)

- ① 上記①②⑥⑦⑧は主に進路指導部が担当する。
② 上記③④⑤は実施教科である英語・数学・国語科が担当する。

(3) 分析結果

①学力状況リサーチについて

(ア) 高校卒業後の進路【問 4】

		1年	2年	3年
大学・短大	4月	202 (63.5%) [69]	169 (54.3%) [67]	130 (42.1%) [38]
	9月	177 (57.8%) [70]	168 (56.4%) [69]	137 (45.4%) [38]
専門学校	4月	72 (22.6%) [6]	76 (24.4%) [3]	125 (40.5%) [2]
	9月	78 (25.5%) [3]	81 (27.2%) [3]	132 (43.7%) [1]
就職・就職進学	4月	5 (1.6%) [0]	11 (3.5%) [1]	10 (3.2%) [0]
	9月	0 (0.0%) [0]	9 (3.0%) [1]	19 (6.3%) [0]
進路未定	4月	39 (12.3%) [5]	55 (17.7%) [8]	44 (14.2%) [0]
	9月	51 (16.7%) [6]	40 (13.4%) [1]	14 (4.6%) [0]

- a. 入学時点(1年生)では大学・短大進学希望者が、学年進行とともにその割合は減っていき、特に3年時には専門学校希望者の割合が急激に増加している。
- b. 生徒たちは簡単に入学できる進路を選択する傾向があり、その理由として「学力的に自信がなく受験を回避する」、「先輩や友人の影響」などが考えられる。
- c. また、学力的に優秀な生徒でも、より上位の学校を目指すという意識が薄い。
- d. 進路未定者数は、4月時点では1・2・3年で39～55人(平均 14.7%)程度、9月時点では1年生がやや増加、2年生やや減少、3年生は進路決定時期が迫っているためか大幅に減少している。

(イ) 進路未定の理由(進路未定者のみ)【問 11】

		1年	2年	3年
学業成績に自信がない	4月	4 (1.25%) [0]	5 (1.60%) [1]	7 (2.26%) [0]
	9月	12 (3.89%) [2]	5 (1.67%) [0]	0 (0.0%) [0]
適性が分からない	4月	20 (6.28%) [3]	34 (10.9%) [3]	23 (7.44%) [0]
	9月	35 (11.3%) [5]	23 (7.69%) [0]	5 (1.65%) [0]

- a. 「学業成績に自信がない」の割合は多くはないが、1年生の9月時点では若干増加しており、高校入学後の学習に不安を感じている生徒が増えているのではないかと。
- b. 進路未定の理由として最も多かったのは「適性が分からない」であったが、4月→9月では1年生で増加が見られる(進路を真剣に考え始めた結果?)。
- c. 2年9月→3年4月にかけて横ばい状態。自らの適性を探り進路決定に向けて積極的に行動をおこそうとする生徒が少ないことが原因?

(ウ) 授業に集中できない場合の理由【問 14】

		1年	2年	3年
授業内容が難しい	4月	95 (29.9%) [14]	72 (23.1%) [16]	52 (16.8%) [5]
	9月	85 (27.6%) [8]	47 (15.7%) [11]	45 (14.9%) [2]
部活で疲れている	4月	27 (8.49%) [5]	21 (6.73%) [7]	37 (11.9%) [6]
	9月	47 (15.3%) [18]	22 (7.35%) [6]	2 (0.66%) [0]
クラスが騒々しい	4月	4 (1.25%) [3]	9 (2.88%) [2]	8 (2.58%) [2]
	9月	8 (2.59%) [1]	4 (1.33%) [0]	16 (5.29%) [2]
基礎学力不足	4月	41 (12.8%) [17]	78 (25.0%) [20]	63 (20.3%) [7]
	9月	64 (20.7%) [26]	82 (27.4%) [25]	59 (19.5%) [13]
集中できている	4月	74 (23.2%) [19]	61 (19.5%) [12]	96 (31.0%) [11]
	9月	44 (14.2%) [7]	67 (22.4%) [10]	87 (28.8%) [5]

- a. 「授業内容が難しい」と感じている生徒の割合は4月→9月で各学年とも減

少しているが、「基礎学力不足」と感じている生徒の割合は1・2年生で増加、特に2年生で多く見られる。

- b. 「集中できている」生徒の割合も1年生で減少している。（「基礎学力不足」「部活動で疲れている」生徒の増加の割合と相関関係がある？）

(エ) 家庭学習のスタイル【問 17】

		1年	2年	3年
毎日ほぼ決まった時間学習	4月	1 9 (5.97%) [9]	4 (1.28%) [3]	7 (2.26%) [2]
	9月	7 (2.27%) [1]	1 4 (4.68%) [8]	1 7 (5.62%) [10]
毎日学習するが時間は決まっていない	4月	6 8 (21.3%) [20]	1 2 (3.84%) [4]	1 5 (4.85%) [9]
	9月	1 6 (5.19%) [4]	1 6 (5.35%) [11]	3 6 (11.9%) [21]
自宅での学習はしない	4月	2 5 (7.86%) [3]	7 3 (23.3%) [4]	8 6 (27.8%) [3]
	9月	7 1 (23.0%) [10]	7 6 (25.4%) [7]	7 6 (25.1%) [1]
宿題によってやり、やらなかったり	4月	3 8 (11.9%) [7]	8 2 (26.2%) [18]	9 7 (31.3%) [6]
	9月	6 5 (21.1%) [15]	8 3 (27.7%) [13]	7 4 (24.5%) [1]

- a. 「毎日ほぼ決まった時間学習」「毎日学習するが時間は決まっていない」生徒の割合は多くはないが、入学後、1年生4月以降は大きく減少しており、逆に「自宅学習はしない」「宿題によって・・・」は1年4月以降の割合は多くなっている。このことから家庭学習の習慣がついていない生徒が多いことが分かる。
- b. 宿題が無いと家庭学習をしないというのが現状で、高校に入学した後、家庭での学習をしなくなる生徒が増えている。（中学校のほうが宿題等が多く、家庭学習が習慣化する環境が整っている？）
- c. 「授業が難しい」「基礎学力不足」と感じている割には授業の予習・復習を習慣化しようという発想に結びついていない。

(オ) 平日の学習時間・休日の学習時間【問 25・26】

平日		1年	2年	3年
ほとんどしない	4月	1 0 5 (33.0%) [28]	2 4 0 (76.9%) [44]	2 4 5 (79.2%) [12]
	9月	2 0 3 (65.9%) [43]	1 9 1 (63.8%) [19]	1 7 7 (58.6%) [3]
30分～1時間	4月	1 5 5 (48.7%) [33]	6 1 (19.5%) [27]	4 2 (13.5%) [18]
	9月	9 5 (30.8%) [34]	8 5 (28.4%) [41]	7 3 (24.1%) [11]
1時間30分～2時間	4月	4 8 (15.0%) [15]	1 2 (3.84%) [8]	1 8 (5.82%) [7]
	9月	1 0 (3.24%) [2]	2 2 (7.35%) [14]	3 5 (11.5%) [20]

休日		1年	2年	3年
ほとんどしない	4月	9 6 (30.1%) [22]	2 0 8 (66.6%) [33]	2 1 9 (70.8%) [10]
	9月	1 4 2 (46.1%) [23]	1 5 8 (52.8%) [9]	1 7 8 (58.9%) [2]
30分～1時間	4月	1 1 5 (36.1%) [24]	7 8 (25.0%) [33]	5 8 (18.7%) [13]
	9月	1 2 6 (8.44%) [34]	8 4 (28.0%) [29]	5 9 (19.5%) [4]
1時間30分～2時間	4月	6 6 (20.7%) [16]	2 2 (7.05%) [10]	2 0 (6.47%) [8]
	9月	3 7 (12.0%) [20]	4 0 (13.3%) [23]	2 9 (9.60%) [9]

- a. 平日の学習「ほとんどしない」1年生で倍増。2・3年生ではやや改善が見られる。
- b. 休日の学習「ほとんどしない」1年生で増加。2・3年生ではやや改善が見られる。
- c. 1年生：学習をしていない(しなくなる?)生徒が多い。
→入学時に身につけている家庭学習の習慣をいかに継続させるかがポイント！

②実力テストの結果にみる本校の概況

本校では、年度はじめの4月と、2学期が始まる9月に全学年一斉に実力テストを実施している。この分析は、国数英3教科の分析を踏まえて、各学年の概況を学習時間との相関において、考察したものである。

(※資料はいずれも『スタディーサポート各学年の概況』による※学習時間単位は<分>)

教科	学習到達レベル		学習時間 (分)				学力レベルB2/B3 (人数) レベル学年間比較			
	9月	4月	9月		4月		2009年度 (本年度)		2008年度 (昨年度)	
			平日	休日	平日	休日	9月	4月	9月	4月
3年総合		C 3	16	25	16	27	29/46		22/37	
							9月	4月	9月	4月
2年総合	C 2	C 2	21	41	12	22	51/90	51/70	22/48	28/43
1年総合	C 2	C 3	16	33	46	70	54/100	27/56	48/87	22/54

- ア. 3学年考察：3学年における学習到達レベルを見てみると、全体的にはC 3レベルであるが、昨年と比較ではB 2（国公立大可能）レベル・B 3（国公立大挑戦）レベルの生徒は増加している。今後は、学習時間の確保と、生徒の学習習慣の確立をどのように促していくかが課題であると思われる。
- イ. 2学年考察：今学年から特進クラスが2クラスに設定されたこともあり、B 2・B 3レベルにおける人数は増加の傾向にある。学習時間も増えているが、まだ十分とは言えず、さらなる学習時間確保が課題である。
- ウ. 1学年考察：1学年では、第1回の実力テストに比べ、第2回の学習到達レベルが、上昇している。日ごろの学習の成果が表れているのではないであろうか。B 2・B 3レベル比較においても第1回実力テストに比べ、増加の傾向がうかがえる。しかし学習時間を見ると、入学当時は平日1時間弱あった学習時間が、2学期始めには、16分と入学後の学習時間の確保が困難になっていることが分かる。その理由に、「部活動に大きな時間が割かれている」ことが上げられており、部活動と学習活動の両立が今後の大きな課題である。
- エ. まとめ：各学年とも全体的な学習到達レベルは過年度に比べて上昇傾向にあると言える。また国公立合格可能レベルであるB 2レベル以上の生徒についても増加し、さらに、国公立挑戦レベルであるB 3を含めると学年の3割弱の生徒が合格の可能性を秘めているという結果であり、今後に期待が持てる。しかし学習時間については学年が進行するにつれて減少していく傾向がある。入学当初の気持ちを持続させ、高校に入学した意義、そして進学を含めた将来に向けての人生設計の重要性を認識させるとともに、希望進路の実現に向けていかにモチベーションを持続させ続けることができるかが今後の飛躍の大きな課題であると言える。

③英語（省略） ④数学（省略） ⑤国語（省略）

⑥学力向上アンケート（職員用）分析（アンケート回答数 50人）

ア.「進路のしおり」の活用度について

◎全体的に見て、担任は活用する機会があるが、各部の職員が活用できる箇所が少ない。

(ア) 全体的に『進路のしおり』を活用したかどうかという点については、活用し

た職員としなかった職員が半々であるが、おもに担任が活用しているようである。
 ただし、進路講演会するときなど必要な時だけという職員が多く、より有効な活用
 方法を検討する必要がある。

1) 全体的に「進路のしおり」を活用しましたか？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	7	19
各部	12	9
不明	3	
全体	22	28

2) 第Ⅰ編「進路について」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	12	14
各部	14	7
不明	3	
全体	29	21

3) 第Ⅱ編「本校で学ぶ教科」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	22	4
各部	19	2
不明	3	
全体	44	6

4) 第Ⅲ編「奨学金について」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	21	5
各部	17	4
不明	3	
全体	41	9

5) 第Ⅳ編「進学について」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	13	13
各部	14	7
不明	3	
全体	30	20

6) 第Ⅴ編「就職について」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	19	7
各部	18	3
不明	3	
全体	40	10

7) 第Ⅵ編「実用資料」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	17	9
各部	13	8
不明	3	
全体	33	17

8) 第Ⅶ編「THEワークシート」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	15	11
各部	17	4
不明	3	
全体	35	15

9) 第Ⅷ編「日程表」を・・・？		
学年 各部	活用していない・ あまり活用していない	必要なとき・割と・ かなり活用した
学年	18	8
各部	20	1
不明	3	
全体	41	9

◎全体的に見て、担任は活用する機会があるが、各部の職員が活用できる箇所が少ない。

(イ) 質問項目(3)(4)(6)(9)の部分については、活用していないと答えた職員が40人を超えており、ほとんど活用されなかったことがわかる。

(ウ) (4)「奨学金について」は説明会で生徒が直接担当から説明を受けている、また(6)「就職について」は本校の就職希望者が10人程度であるためそれぞれ利用の機会が限られていると考えられる。

(エ) (3)「本校で学ぶ教科」については説明文だけだったため、ほとんど活用されなかった。最初に教科担当から説明のある評価のポイントや授業方針また定期テスト

の試験範囲を書き込めるようなワークシート式にすることで、活用度を上げたいと考えている。さらに、進路選択との関わりや理系文系の選択の参考になる資料を追加する予定である。

(オ) (9)「日程表」については、使い方が曖昧であったため活用されなかった。年間の活用スケジュールの作成と学年会での説明会を行い活用を促したい。

イ. 本校における学習活動の問題点について (複数回答可)

① 基礎学力不足	11	⑥ 学習環境	3
② 予習復習の不足	33	⑦ 学習意義の理解不足	21
③ 学習方法がわからない	17	⑧ 進路に対する興味・関心不足	14
④ 授業への心構え、集中力	19	⑨ 検定・資格試験の知識不足	2
⑤ 学習時間の確保	24		

(ア) 学習活動の問題点として、②⑤⑦という回答が多い。

(イ) ②予習復習の不足と⑤学習時間の確保は「進路のしおり」の日程表を活用することで生徒の自己管理や自学自習を促せると考えられる。

(ウ) ⑦学習意義の理解不足は「本校で学ぶ教科」の進路との関わりを活用し、年度初めに生徒に理解を求めたい。

ウ. 学力向上のために効果が期待されるもの (複数回答可)

① 課題を与える	28	⑥ 教科担任との面談	9
② 小テスト	31	⑦ 勉強法や進路との関わりを説明する	12
③ ノート・ファイル提出	13	⑧ 進路統一LHRの設定	13
④ 講座の充実	7	⑨ しおりの充実	2
⑤ 担任との面談	9		

(ア) 学力向上のためには①②③にあたる生徒に直接働きかけ学習させる方法と、⑦⑧のような学習に対する意識を高め、自らの学習意欲を引き出す方法の2つに分けられる。

(イ) 特に⑦⑧については「進路のしおり」を活用することで学級間で差のない指導が期待できる。

エ. 「進路のしおり」の主な活用場面について (複数回答可)

① 三者面談	11	④ LHR	16
② 二者面談	9	⑤ SHR	2
③ 授業でのオリエンテーション	4	【その他】面接アクションプログラム	

(ア) 担任は「進路のしおり」が意図する場面での活用をしている。

(イ) 教科担当として③授業でのオリエンテーションを行い、学習の方法・ポイント・評価、進路との関わりを説明する際に「本校で学ぶ教科」を活用してもらいたい。

オ. 「進路のしおり」の活用で得られた成果について (複数回答可)

① 生徒の進路に対する意識向上	9	⑥ 職員の進路指導がスムーズ	15
② 生徒の進路への取り組みがスムーズ	9	⑦ 職員の進路情報理解度が上がった	7
③ 生徒の進路室・資料室利用が増えた	1	⑧ 職員の学習活動把握	1
④ 生徒のやる気向上	2	⑨ 職員の面接指導がスムーズ	21
⑤ 生徒の成績向上	0		

【その他】

家庭学習の時間を記録させることで、少しは家庭学習時間が増えたように感じる。

- (ア) 生徒側は進路への意識向上や取り組み易さ等の成果が見られるが、やる気や成績向上へのつながりができていない。
- (イ) 職員の進路指導への活用は3学年担任と進路部がほとんどであった。進路希望の早期決定を考えると、1・2学年も活用できるような工夫が必要である。
- (ウ) 今年度から、全職員で面接指導を行っているのでよく活用された。

カ. その他要望等について

- (ア) 「進路のしおり」に目を通す時間を設定してほしい。
- (イ) 小論指導に関する資料も載せてほしい。

IV 研究の成果と課題（中間まとめ）

「人が何かに意欲的になるのは、その環境の中に『意欲的に取り組んでいる人』がいる時である」というエッセイを目にしたことがある。学年の中での特進クラスの「やる気」が、各クラスの中での個人の「やる気」が、「ある点」から波の広がるように伝われば素晴らしいことである。「進路のしおり」の再編にはこの願いを込めた。

編集に当たっては、当時の1学年会からの要望を受け「進路」についての必要最低限の情報を掲載するようにつとめた。またこの「1冊」が高校生活のあらゆる場面での足跡を記すものとして働くよう、平成21年4月には各学年会への説明を行った。そして、全体集会の度に「進路のしおり」に記録することの重要性を生徒にも訴えかけた。しかし、本年度の様々なアンケート結果を見ると、まだ効果的に活用されていないのが現状である。この現状打開に向けてまず必要なことは、職員間での共通理解である。そしてそのためには特に、進路指導部と学年会が「進路のしおり」の活用方法を検討する必要がある。さらに、アンケートからは利用しやすい「進路のしおり」という観点から改編しなければならない点も浮かび上がってきた。この点については速やかに改編し、来年度に間に合うようにしたい。ただ、現1、2年生は、本年度発行の「進路のしおり」を持ち上げるため、その有効活用方法に力を入れなければならない。それは取りも直さず、日頃の学習活動の中で、生徒が進路を考える機会をいかにつくり、いかに記録させるかの工夫である。

今中間発表においては、本校の現状の提示から、課題解決への方向性を求めた。生徒の意欲を数字で図ることは困難である。しかし、その一部は「家庭学習時間」となって表れるのも否めないと考える。それにJ5進路講演会や夏期集中学習会がどう関係するのかというのも興味深い。よって、来年度に向けては、「進路のしおり」を架け橋にして教師が生徒を励ます中、家庭学習時間が増える環境を整える試みをさらに検証したい。